

「安政の大獄」と「桜田門外の変」

絵本 桜田門外の変 「桜田実記」

国立国会図書館 蔵



篠田久次郎 編輯

弥生の雪

桜田実記 全



伏者として軍艦砲撃口糧あり
 浦賀港へ入りとんざりこれに
 依てお常のこめ徳川政府
 諸侯も下知し海岸を加こめ
 させ徳艦中め徳役人種々
 弾薬ありの上アソリカの燃常
 退て退虫つうらんと申し徳艦
 艦督ヘルリハは船を約し一且
 還航し及びかく政府あり
 交易の儀に付徳又弾定あり
 とう水戸黄門御昭々徳役人に
 うち向ひ是と我はゆらざる



美玉と交陸お成す此後
 亞船来りあがまをたに打松以
 日本武勇のやど知れせ
 今んと作せある徳役人
 只後示り吳人々志と
 徳是今を燭とひき
 三ヶ砲湖とて徳
 アソリカを殺方騎
 あり攻
 来らば
 つらほてあせむ
 死和後る手に



飯田一郎



老侯様昭公と玉汗
禁個よりせり

元老井伊氏
の勢ひた

旭日の

のさる

~~~~~

我が  
我々の

あるまじきまくりはるが

ある時未だある紀伊守

系に降りて連門と

通行の隠儀の古手の上へ

樹木の内ふドウと知るを

籠まり井伊氏の為なる

強丸ハ刀の柄止り

常盤根の士八方

種々拷問の士







我々先年控歴の心うろた  
り水府の老公小超天

鯉淵要入

我々週一日もさるるひは  
我々の志を継ぎ各々  
力と命をたれ根中ねと

付録一乃去當今  
市中探案きびりおが  
らうと控合あり

がに喜ひ流川者  
お侍とりのる案をい

拙者殿とのめあわが  
彼が方面て集

とせん  
とせん  
とせん

齋藤監物

有村の川多る山崎屋一列り表向  
おとと披務一統の人と終日湯宴

とせん  
とせん  
とせん

とせん  
とせん  
とせん

とせん  
とせん  
とせん

とせん  
とせん  
とせん

とせん  
とせん  
とせん

森五六郎









井俣氏を  
討つる次  
舟をのり  
さしゆく燃め  
る虫を一封の  
懐中へ赤合羽  
小舟をやつ  
櫻田はして思ひ  
○慈小斎根中抱  
辰の別の老敷と  
さゆに供り  
そらく郎と  
つを櫻田見  
附の跡方まで  
加る縁とせむ  
ゆて遊ばし  
杉山跡一舟  
稲田重藏  
みふぐ形と



道付と  
駕籠  
日死の  
備士兵  
つ子の書物と  
おひくばら  
世死まるおま  
とある人を刺す  
さう有村流  
萬海老の舟  
大関和七舟

杉山跡一郎



稲田重藏  
▲様はつ大書  
さうりさく  
おをさあ  
大老  
家  
の大  
奉に  
ゆそと  
ゆわく



漢器おん身○窓

三十前○山口辰之助

等ハ二二二二

先世へ礼入せり

井伊家の借方

大のふ

そ曲若

付止よと

移と小

付とる

ふんぎ

おん

本林五六郎



漢三郎○漢本松之助

朝潮要人○林

等ハ市と倍ハ切入

そ是は

茶後

た

小人

か

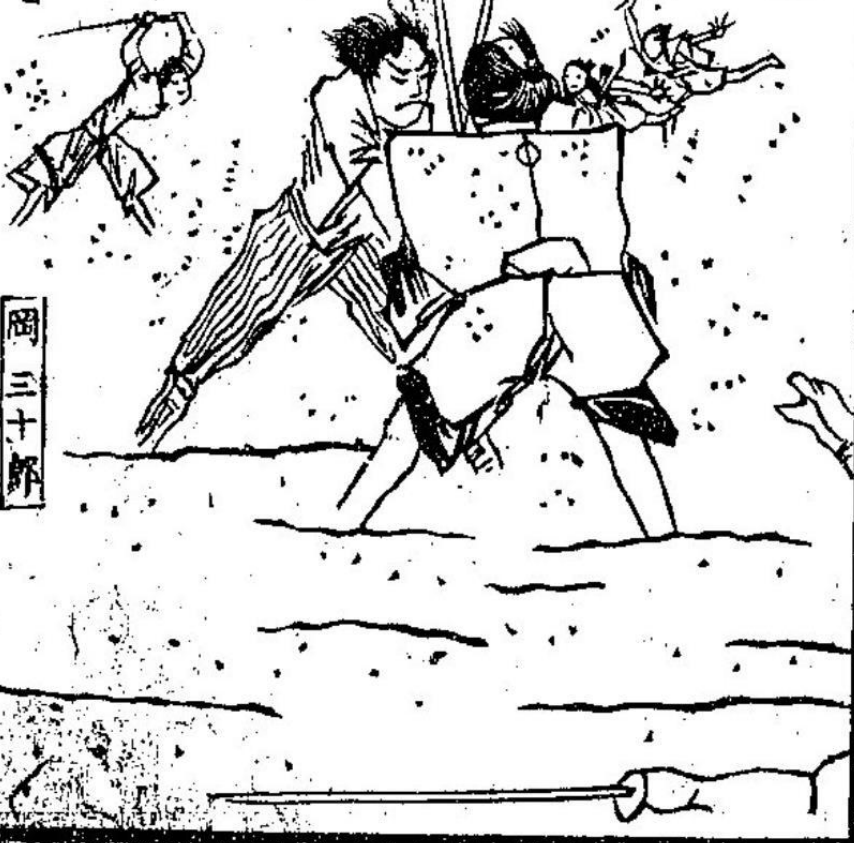
ま

案

たり

入

日



岡三十郎



稲田重藏

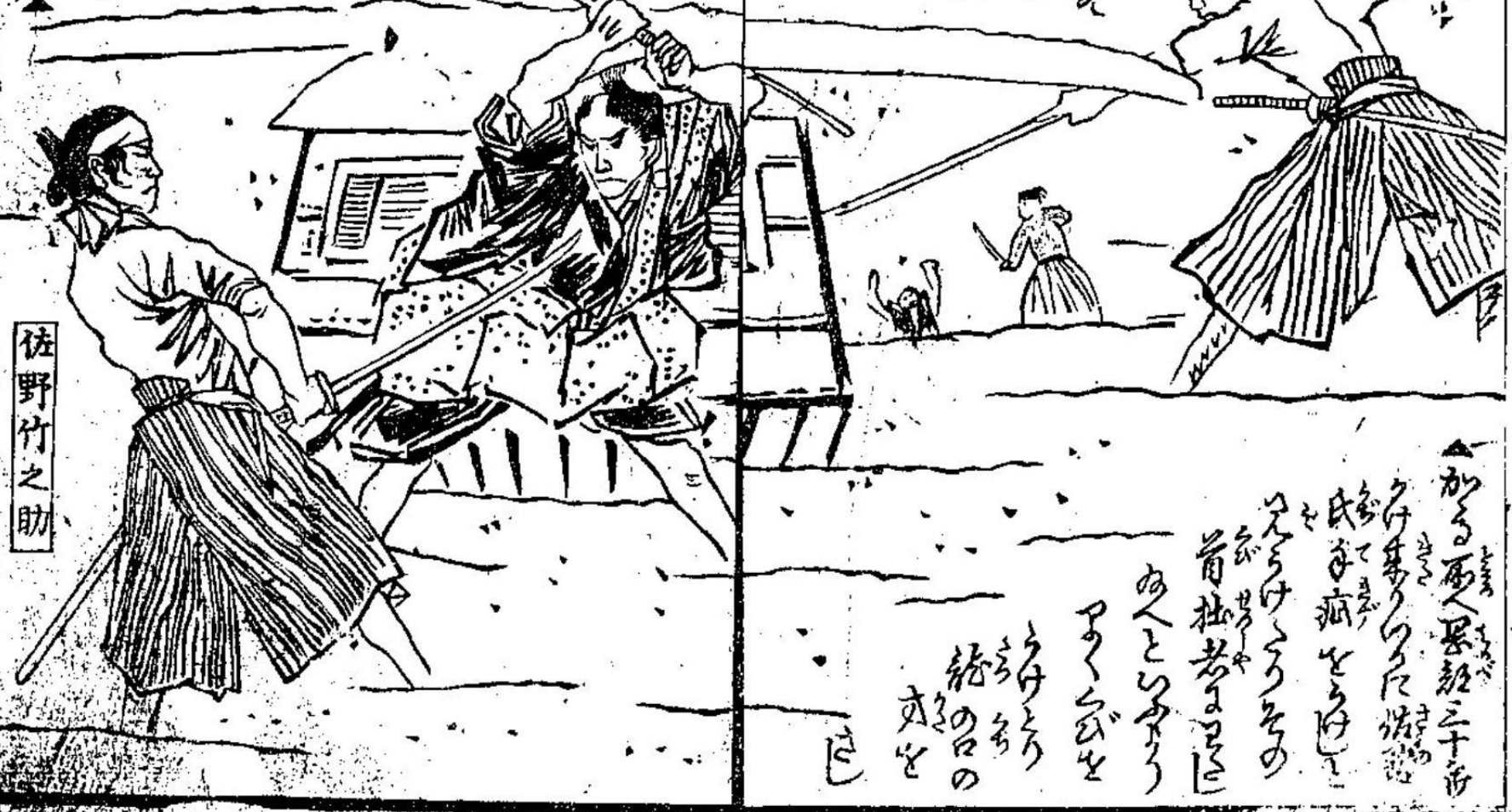
蓮内市五郎  
後本松と助

國夫と女  
留稲田を  
たすけ置や  
踏ま火を散し  
戦ありけ何佐助  
竹と助の余の戦ひ  
小目とけはかどの  
戸テウと押すあり  
彦根中ねの首



とあけ佐助と助  
中ねと付た  
物りと大音あ  
呼るを彦根の  
長田中ね末  
中ね花んで  
籠あり者

の敵逃さどと  
竹と助あ切て  
するを勇猛名代  
の宍村次左衛門  
竹と助小助力あり



佐野竹之助

かろあ人屋敷二十番  
之けあうのた佐助  
氏子病をよけ  
えんけうその  
首掛考よはに  
あ人といやう  
あくふを  
うけとり  
結の台の  
文を  
は

姜日



有村治左工門

花がぐくく小  
 まき  
 老きりなる  
 今いそぢん安一と  
 若中振板家に見ゆ  
 此日の事件を自訴  
 り子者ありま  
 細川家みゆる  
 らありり中  
 りも省村治左の  
 及び森余の浪士の  
 弥生雪桜田実記了



明治十年六月廿五日出版御届

編輯人 篠田久次郎

第五大區七小區  
下谷上野町十三番地

出版人 杉浦朝次郎

第五大區一小區  
浅草茅町二丁目  
十一番地